

# 大学生による教員推薦図書の利用実態とその効果

——図書館情報学概論における推薦図書を事例として——

小 山 憲 司

## 目 次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査方法
4. 調査結果
5. 考 察
6. おわりに

### 1. はじめに

2023年3月、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出されてから3年が経過した。世界保健機関は5月5日、「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態宣言」(2020年1月30日)の終了を発表し、日本国内でも5月8日に新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類感染症に移行した。2023年9月現在、再び新型コロナウイルスの感染が拡大し、医療機関などではマスクの着用や手指消毒の要請が継続しているものの、夏休み期間中の人びとの移動、インバウンド需要の回復など、日本社会はコロナ禍以前に戻りつつある。

新型コロナウイルス感染症は大学教育にも大きな影響を与えたことは記憶に新しい。筆者が勤務する中央大学でも2020年度の入学式は中止され、前期授業の開始も遅れた。授業はオンラインで実施され、教職員はその準備に追われた。学生も慣れないオンラインでの授業にとまどい、苦勞したことであろう。そのような中、教職員はWebexやZoomといったオンライン会議システムに習熟

し、manabaやGoogle Classroomなどの学習管理システム(Learning Management System, 以下LMS)を活用した授業を展開してきた。この間、授業で用いる著作物をオンラインで利用できるようにする権利処理の仕組みも、加速度的に整備された。2023年度は対面形式の授業が基本となったが、オンライン授業の実施で培われたノウハウや経験が今後の大学教育に活かされることであろう。

大学図書館もまた、大学教育に資するためにさまざまなサービスを実施した。コロナ禍当初は感染拡大を避けるため閉館措置をとっていたが、学生の学習教材である図書館資料を提供するため、電子情報資源を確保したり、郵送貸出を実施したりした。また、感染状況に合わせて入館者数や滞在時間を制限する一方、マスク着用や手指消毒、三密の回避などを条件に図書館利用を緩和するなど、柔軟に対応した。

授業教材の一部を大学図書館に依存する教員にとって、図書館資料へのアクセスは重要な課題であった。特に、2020年度のオンライン主体の大学教育では、教室で提供していたさまざまな話題をオンラインで配信する資料に盛り込む必要があった。主たるトピックであれば教員が作成するプレゼンテーション資料や説明動画に掲載できたが、関連する話題を盛り込むことは容量や時間の観点から難しかった。学生一人ひとりのペースに任せるオンデマンド形式のオンライン授業であれば、なおのことである。そのため、参考資料とし

て図書や雑誌論文、新聞記事などを紹介する必要があった。

テキスト以外に授業に関連する資料として参考文献を提示することは、これまでも行われてきた。ここで1つの疑問が生じる。教員が提示した参考文献は実際に利用されているかという問いである。大学生の不読が話題になって久しいが、学びの一環として、あるいは娯楽や趣味として読書する学生も一定数存在する。そのような中、教員による図書の紹介は学生の読書のきっかけとなっているのであろうか。そこで本研究では、中央大学文学部人文社会科学情報学専攻図書館情報学コースの必修科目であり、司書課程の必修科目でもある図書館情報学概論で推薦した図書を学生がどの程度利用したかを調査、分析することとした。

本稿の構成は次のとおりである。2章では、大学生を対象とした読書研究のうち、読書のきっかけに関する先行研究を中心に取り上げる。3章では本研究の調査方法を、4章では調査結果を示す。5章では調査結果を考察し、教員による図書紹介について検討する。

## 2. 先行研究

戸田らは、北海道教育大学札幌校の学生160名を対象に読書行動に関するアンケート調査を実施した<sup>1)</sup>。設問の1つとして、読書のきっかけを尋ねている。その結果、最も多かったのは「知りたいことがある」で50.6%、次いで「作家に興味・関心をもった」41.8%、「友人の勧めや貸し」と「宣伝広告」が37.3%と続いた。「先生の勧め」は22.2%で、「その他」を除く10個の選択肢中7番目であった。

佐藤らによる立命館大学ほか6大学の学生を対象とした調査では、教員から本の紹介など読書に関するアドバイスを受けたことがあるかどうかを尋ねている<sup>2)</sup>。その結果、約6割の学生がなんらかのアドバイスを受けたことがあると回答してい

るのに対して、残りの約4割の学生はほとんど経験がないと回答した。アドバイスを受けた学生のうち、約7割は読書の動機づけになった、多少はなったと回答しており、読書に対する教員の影響が示唆される。

教員によるアドバイスの影響に関しては、キムと小山の研究がある<sup>3)</sup>。キムらは中央大学の学生252名を対象に読書実態調査を実施し、読書推進の可能性を検討した。その結果、読書に関するアドバイスがある授業を受講している学生ほど読書に繋がっていること、読書を積極的に採り入れる授業に賛同する学生は半数に上るが読書の多寡とは関係がないこと、学生は読書を採用する授業によって強制される読書を少なからず求めていることなどが明らかとなった。

教員のアドバイスと類似する取り組みとして、上月は大阪体育大学教育学部における教員による推薦図書をまとめたガイドブックを制作、配布する事例を紹介している<sup>4)</sup>。ガイドブックによる成果は明らかとなっていないが、数名の学生からの聞き取りでは、既知の教員からの推薦や推薦文が読書の動機となっているようすが窺われた。同様の取り組みは各大学の図書館でも広く行われているであろう。また、ガイドブックの執筆を学外に依頼し、その本を中心としたユニークな読書空間を設置して話題を呼んだ、國學院大学のみちのきちプロジェクトもある<sup>5)</sup>。

王と濱中は、東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センターが実施した第2回全国大学生調査のデータを基に大学生の読書実態を分析している<sup>6)</sup>。その結果、読書に正の効果をもたらす要因として、興味がわくよう工夫された授業や学生に意見を求める参加型の授業が見出された。また、明確な将来像を持ち、それが学びと合致している学生や、学びとは必ずしも合致していないが将来像に向けて自ら学んでいる学生は、読書量が多い傾向であることも明らかとなった。

### 3. 調査方法

#### 3.1 図書館情報学概論の概要

本研究で調査対象とするのは、筆者が担当する図書館情報学概論の受講生である。図書館情報学概論は、文学部人文社会科学部社会情報学専攻図書館情報学コースの1年生の必修科目であり、同専攻情報コミュニケーションコースの選択必修科目である。また、司書課程の必修科目でもある。加えて、文学部の学生であればだれでも受講できるゴシック科目と呼ばれる共通科目にも設定されている。したがって、図書館情報学概論の受講生は、①図書館情報学コースの主に1年生、②情報コミュニケーションコースの主に1年生、③司書課程を履修する2年生以上、④文学部の学生となる。

図書館情報学概論は、社会情報学専攻の専門科目であると同時に、図書館法施行規則に定められ

た図書館に関する科目の1つである図書館概論に相当する。授業計画は、これからの図書館の在り方検討協力者会議の『司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について（報告）』（2009年2月）<sup>7)</sup>に基づき、司書課程の基礎科目として位置づけられる内容となっている。その際、専門課程の学生をはじめ、多くの学生に図書館の機能や役割、社会的意義を理解してもらえるよう、また受講後にも図書館に興味関心を抱いてもらえるよう配慮している。そのための工夫が授業ごとに関連図書を紹介する取り組みである。

表1は、2023年度前期の授業計画とそこで紹介した図書37タイトルの一覧である。図書の書誌情報の前に付いている番号は、授業回と紹介した順番を表している。例えば、『つながる図書館：コミュニティの核をめざす試み』（猪谷千香著、筑摩書房、2014.（ちくま新書、1051））の前にある

表1 図書館情報学概論の授業計画と紹介した図書

番号	書誌情報	分類記号
第1回	ガイダンス、司書課程の全体像と修得すべき内容	
	なし	
第2回	情報社会における図書館：図書館とはなにか	
2-1	レイ・オルデンバーグ著、忠平美幸訳、サードプレイス：コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」、みすず書房、2013.	361.78
2-2	猪谷千香著、つながる図書館：コミュニティの核をめざす試み、筑摩書房、2014.（ちくま新書、1051）.	010.21
2-3	*市古みどり編著、資料検索入門：レポート・論文を書くために、慶應義塾大学出版会、2014.（アカデミック・スキルズ）.	007.5
第3回	図書館が扱う情報とはなにか	
3-1	佐藤文隆著、孤独になったアインシュタイン、岩波書店、2004.	421
3-2	佐藤雅彦著、ベンチの足：考えの整頓、暮しの手帖社、2021.	914.6
第4回	図書館の基本機能（1）：収集	
	なし	
第5回	図書館の基本機能（2）：整理、蓄積・保管、検索、利用	
	なし	
第6回	各種図書館とサービス対象者（1）：公共図書館	
6-1	菅谷明子著、未来をつくる図書館：ニューヨークからの報告、岩波書店、2003.（岩波新書、新赤版837）.	016.25321
6-2	*常世田良著、浦安図書館にできること：図書館アイデンティティ、勁草書房、2003.（図書館の現場；1）.	016.2135
6-3	*高山正也、岸田和明編著、逸村裕、平野英俊著、図書館概論、改訂、樹村房、2017.（現代図書館情報学シリーズ／高山正也、植松貞夫監修；1）.	010

第7回 各種図書館とサービス対象者(2):公共図書館におけるサービスの展開		
7-1	ジョン・ポールフリー著, 雪野あき訳. ネット時代の図書館戦略. 原書房, 2016.	010
7-2	ジェシー・H・シェラ著, 川崎良孝訳. パブリック・ライブラリーの成立. 日本図書館協会, 1988.	016.253
7-3	藤野幸雄編著. 図書館を育てた人々. 外国編 1. アメリカ. 日本図書館協会, 1984.	010.28
7-4	*村井実全訳解説. アメリカ教育使節団報告書. 講談社, 1979. (講談社学術文庫; [253]).	372.1
7-5	日本図書館協会編. 中小都市における公共図書館の運営 復刻版. 日本図書館協会, 1973.	016.2
7-6	日本図書館協会編. 市民の図書館. 増補. 日本図書館協会, 1976.	016.2
第8回 各種図書館とサービス対象者(3):国立国会図書館		
8-1	町田そのこ著. 52ヘルツのクジラたち. 中央公論新社, 2020.	913.6
8-2	中島京子著. 夢見る帝国図書館. 文藝春秋, 2019.	913.6
8-3	長尾宗典著. 帝国図書館:近代日本の「知」の物語. 中央公論新社, 2023. (中公新書:2749).	016.11
第9回 各種図書館とサービス対象者(4):学校図書館		
9-1	木下通子著. 読みたい心に火をつけろ!:学校図書館大活用術. 岩波書店, 2017. (岩波ジュニア新書, 855).	017
9-2	野口武悟, 大滝一登編著. 学びの環境をデザインする学校図書館マネジメント. 悠光堂, 2022. (シリーズ学びの環境デザインを考える, 第1巻).	017
9-3	成田康子著. 高校図書館:生徒がつくる, 司書がはぐくむ. みすず書房, 2013.	017.4
9-4	クリスティーナ・A.ホルズワイス, ストーン・エヴァンス [著]. 松田ユリ子, 桑田てるみ, 吉田新一郎訳. 学校図書館をハックする:学びのハブになるための10の方法. 新評論, 2021.	017
第10回 各種図書館とサービス対象者(5):大学図書館, 専門図書館		
10-1	斉藤道子編著. 首都圏大学図書館ガイド:オトナの知的空間案内. メイツ出版, 2015.	017.713
10-2	加藤信哉, 小山憲司編訳. ラーニング・commons:大学図書館の新しいかたち. 勁草書房, 2012.	017.7
10-3	青柳英治, 長谷川昭子共著. 専門図書館探訪:あなたの「知りたい」に応えるガイドブック. 勉誠出版, 2019. (ライブラリーぶっくす).	018.021
第11回 図書館を支える法制度と基本理念		
11-1	有川浩著. 図書館戦争. メディアワークス, 角川書店(発売), 2006.	913.6
11-2	S.R.ランガナタン著, 渡辺信一, 深井耀子, 浜田義行共訳. 図書館学の五法則. 日本図書館協会, 1981.	010.1
11-3	竹内哲解説. 図書館の歩む道:ランガナタン博士の五法則に学ぶ. 日本図書館協会, 2010.	010.1
11-4	竹内哲編. 「図書館学の五法則」をめぐる188の視点:『図書館の歩む道』読書会から. 日本図書館協会, 2012. (JLA図書館実践シリーズ:20).	010.1
第12回 図書館経営と司書		
12-1	門井慶喜. おさがしの本は. 光文社, 2011. (光文社文庫).	913.6
12-2	*スーザン・オーリアン著, 羽田詩津子訳. 炎の中の図書館:110万冊を焼いた大火. 早川書房, 2019.	016.25393
12-3	*高田大介著. 図書館の魔女=de sortaria bibliothecae. 上, 下. 講談社, 2013.	913.6
12-4	*波頭亮著. プロフェッショナル原論. 筑摩書房, 2006. (ちくま新書:629).	366.29
第13回 図書館における現代的課題		
13-1	谷一文子著. これからの図書館:まちとひとが豊かになるしかけ. 平凡社, 2019.	010
13-2	アントネッラ・アンニョリ [著]. 萱野有美訳. 拝啓市長さま, こんな図書館をつくりましょう. みすず書房, 2016.	016.2
13-3	植村八潮, 柳与志夫編. ポストデジタル時代の公共図書館. 勉誠出版, 2017.	010
13-4	フェルナンド・バエス著, 八重樫克彦, 八重樫由貴子訳. 書物の破壊の世界史:シュメールの粘土板からデジタル時代まで. 紀伊國屋書店, 2019.	023.8
13-5	小山勝著. 戦争と図書館:英国近代日本語コレクションの歴史. 勉誠出版, 2018.	014.7
第14回 まとめ		
	なし	

2-2は、第2回目の授業の2冊目に取り上げた本であることを示している。

選書にあたっては、本学図書館で所蔵しているものを前提に、授業内容に関連し、かつ①授業後の学習に役立てられる専門書、②授業後の学習に役立てられる一般書のほか、③授業で触れることで図書館の理解を促せる文芸書も対象とした。例えば、第8回で紹介した『52ヘルツのクジラたち』(8-1)、『夢見る帝国図書館』(8-2)、第11回の『図書館戦争』(11-1)、第12回の『おさがしの本は』(12-1)、『図書館の魔女』(12-3)はいずれも文学作品である。

選定した図書37タイトルの内訳を日本十進分類法で見ると、0類の総記が27タイトルで最も多く、このうち24タイトルが図書館関連の図書である<sup>8)</sup>。次いで9類の文学に属する図書が6タイトル、3類社会科学が3タイトル、4類自然科学が1タイトルであった。

これらの図書のうち\*記号の付いた7タイトルは、事前学習課題としてその一部をLMSを通じて配布し、授業前に読んでくることを前提として授業を行った。また、いずれの図書も授業で用いるスライドに書誌情報と書影を掲載したり、現物を見せたりしながら、簡単に内容を紹介した。スライド資料はLMSにPDFとして掲載したほか、第6回目の授業以後は、各回の終了後に本学図書館のオンライン閲覧目録(Online Public Access Catalog, 以下OPAC)へのリンクを付した図書リストをアップロードした。学生がこのページにアクセスし、リンクをクリックすれば、本学図書館の所蔵情報を知ることができるようにした。

### 3.2 アンケート調査の概要

アンケート調査は、①授業で紹介した図書の利用状況、②教員が授業で図書を紹介することへの意見、③他者の推薦による読書の実際、④最近1ヶ月の読書経験の4点に関する調査票を設計し、授業の最終回である2023年7月19日に

LMSを用いて実施した。受講者73名のうち、67名から回答を得た。回収率は91.8%であった。回答者の内訳は、1年生39名(58.2%)、2年生16名(23.9%)、3年生10名(14.9%)、4年生および大学院生2名(3.0%)であった(図1)。

アンケート調査項目のうち、①授業で紹介した図書の利用状況では、各回で紹介した図書それぞれに関して、「1.大学の図書館で借りた」「2.地域の図書館で借りた」「3.大学の図書館で閲覧した」「4.地域の図書館で閲覧した」「5.検索した」「6.購入した」「7.以前に読んだことがある」「8.特になにもしていない」の8つの選択肢の中から1つを選んでもらった(図2)。

また、アンケート調査項目の②は、教員が授業で図書を紹介することについてどう思うかを自由記述で回答してもらった。③の他者の推薦による読書の実際は、「人に勧められて本を読むとき、だれから勧められて読んでみますか。あてはまるものをすべて選択してください。」という設問を立て、「1.友人」「2.親」「3.兄弟姉妹」「4.祖父祖母」「5.その他の家族」「6.先生」「7.その他」「8.人に勧められて本を読むことはない」の8つの選択肢から複数回答で回答してもらった。最後に④最近1ヶ月間に何冊の図書を読んだかも自

図1 回答者の属性(学年)

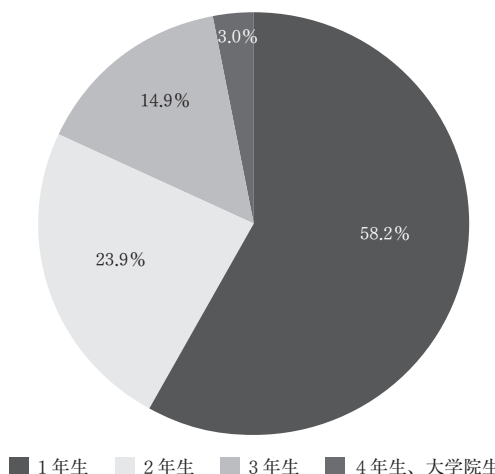


図2 アンケートの例

1. この授業では37冊の本を紹介しました。それぞれの本について、みなさんかのように利用したかを選択肢の中から一つ選択してください。

第2回 情報社会における図書館

【(1) レイ・オルデンバーグ著、忠守美幸訳、サードプレス:コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」みすず書房、2013。(選択必須)】

1.1

1.  大学の図書館で借りた
2.  地域の図書館で借りた
3.  大学の図書館で閲覧した
4.  地域の図書館で閲覧した
5.  検索した
6.  購入した
7.  以前に読んだことがある
8.  特になにもしていない

【(2) 猪谷千香著、つながる図書館:コミュニティの核をめざす試み、筑摩書房、2014。(5/5未満新書、1051)。(選択必須)】

1.2

1.  大学の図書館で借りた
2.  地域の図書館で借りた
3.  大学の図書館で閲覧した
4.  地域の図書館で閲覧した
5.  検索した
6.  購入した
7.  以前に読んだことがある
8.  特になにもしていない

由記述形式で尋ねた。

## 4. 調査結果

### 4.1 最近1ヶ月の読書経験

図3は、回答者が最近1ヶ月の間に読んだ図書の冊数を示したものである。最も多かった回答は2冊の19人で28.4%であった。次いで1冊の16人(23.9%)、3冊の15人(22.4%)が続いた。1冊から3冊と回答した人が約4分の3を占めた。

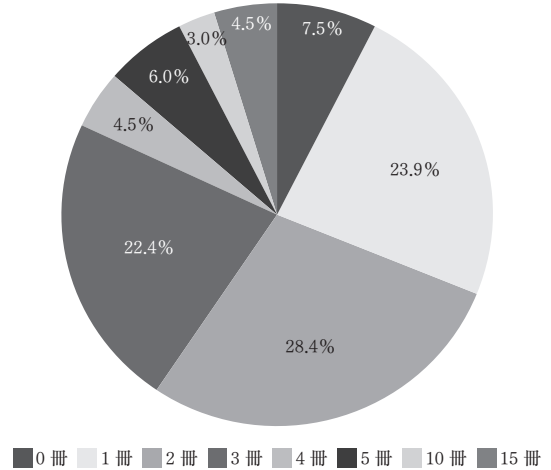
一方、1冊も本を読まなかったと回答したのは5人で、7.5%であった。2022年に実施された第58回学生生活実態調査によれば、1日の読書時間が0分と回答した人の割合は46.4%であった<sup>9)</sup>。一概にこの調査結果と比較することはできないが、図書館情報学概論を受講する学生は、一般の学生に比べ、読書の習慣を持っていることが推察される。

### 4.2 紹介した図書の利用状況

#### (1) 全体

授業で紹介した図書37タイトルそれぞれについて、その利用状況を尋ねたところ、すべての図

図3 最近1ヶ月の間に読んだ図書の冊数



書で最も多かったのは「8. 特になにもしていない」で、合計で2,083人、タイトルごとの回答者数は32人から64人であった。平均すると、1タイトルあたり56.3人(84.0%)で、10人中8人ないし9人は紹介された本を借りたり、買ったりしていなかったし、検索もしていなかった。次いで「5. 検索した」と回答した人が合計で260人、「7. 以前に読んだことがある」が74人、「4. 地域の図書館で閲覧した」33人、「3. 大学の図書館で閲覧した」11人、「6. 購入した」9人、「2. 地域の図書館で借りた」6人、「1. 大学の図書館で借りた」3人であった。

(2) 各図書の利用状況(「8. 特になにもしていない」を除く)

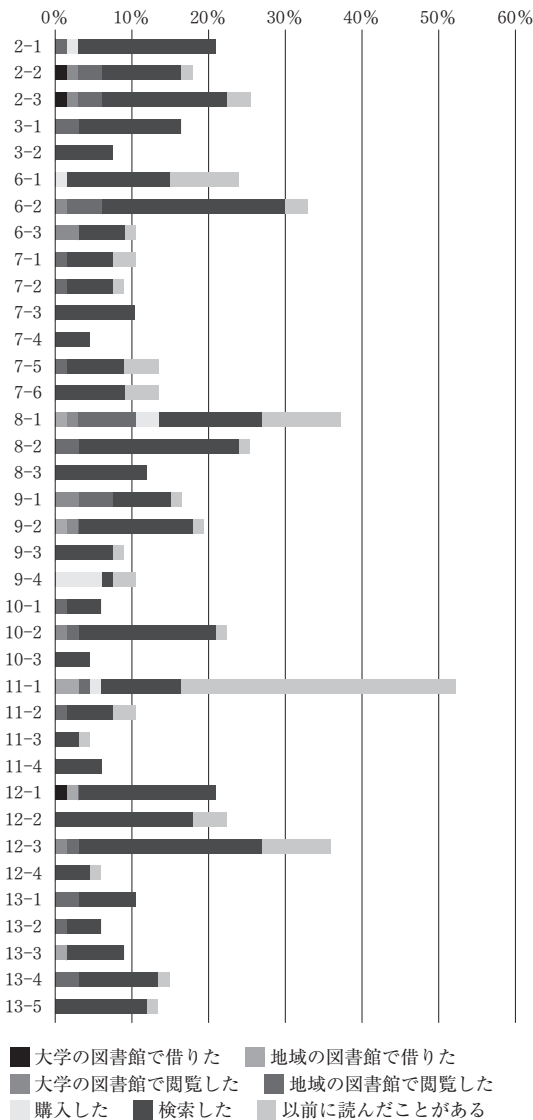
図4は、「8. 特になにもしていない」を除いた各図書の利用状況を示したものである。最もよく利用されていたのは11-1の『図書館戦争』(有川浩著、メディアワークス、2006)の35人(52.2%)であるが、その大半は「7. 以前に読んだことがある」人(24人、35.8%)であった。次いで8-1『52ヘルツのクジラたち』(町田そのこ著、中央公論新社、2020)の25人(37.3%)、12-3

『図書館の魔女 = de sortiaria bibliothecae』(高田大介著, 講談社, 2013) の24人(35.8%)が続いた。

「7. 以前に読んだことがある」を除いた場合、最も多く学生の関心を集めたのは、6-2の『浦安図書館にできること：図書館アイデンティティ』(常世田良著, 勁草書房, 2003。(図書館の現場：

1))で20人(29.9%)であった。次いで『52ヘルツのクジラたち』(8-1)と『図書館の魔女 = de sortiaria bibliothecae』(12-3)が同率で18人、26.9%であった。『浦安図書館にできること』は、第6回授業で序章を用いた宿題を出したこと、第7回で第4章と第7章を参考文献として紹介したことから学生の関心を引いたものと推測される。

図4 紹介した図書の利用状況(「8. 特になにもしていない」を除く)



(3) 手に取られた図書とその利用状況

アンケート調査で提示した選択肢の中から「1. 大学の図書館で借りた」「2. 地域の図書館で借りた」「3. 大学の図書館で閲覧した」「4. 地域の図書館で閲覧した」「6. 購入した」を選んだ人は、授業で紹介されたのち、何らかの形で行動に移して、実際にその本を手にとった人である。そこで、「7. 以前に読んだことがある」人を除いた回答者数を分母として、その割合を算出した(図5)。授業で紹介した影響を検討するためである。

その結果、最も多く手に取られた図書は、第8回の授業で紹介した『52ヘルツのクジラたち』(8-1)で、9人(15.0%)であった。この本は、国立国会図書館の役割の1つである全国書誌の作成について説明するときを用いたものであり、本の内容と図書館とは直接関係がない。2021年に本屋大賞を受賞した作品であったこと、授業日(2023年6月7日)前に文庫本が発売され、映画化決定のニュースと相まって話題になっていたことから、学生にとっても馴染みがあると考え、取り上げた。内訳は、「2. 地域の図書館で借りた」人が1人、「3. 大学の図書館で閲覧した」人が1人、「4. 地域の図書館で閲覧した」人が5人、「6. 購入した」人が2人であった。

次いで手に取られた本は、『図書館戦争』(11-1)であった。第11回の図書館を支える法制度というテーマの中で扱った「図書館の自由に関する宣言」に関連して紹介した図書である。回答結果は「2. 地域の図書館で借りた」人が2人、「4. 地域の図書館で閲覧した」人が1人、「6. 購入した」

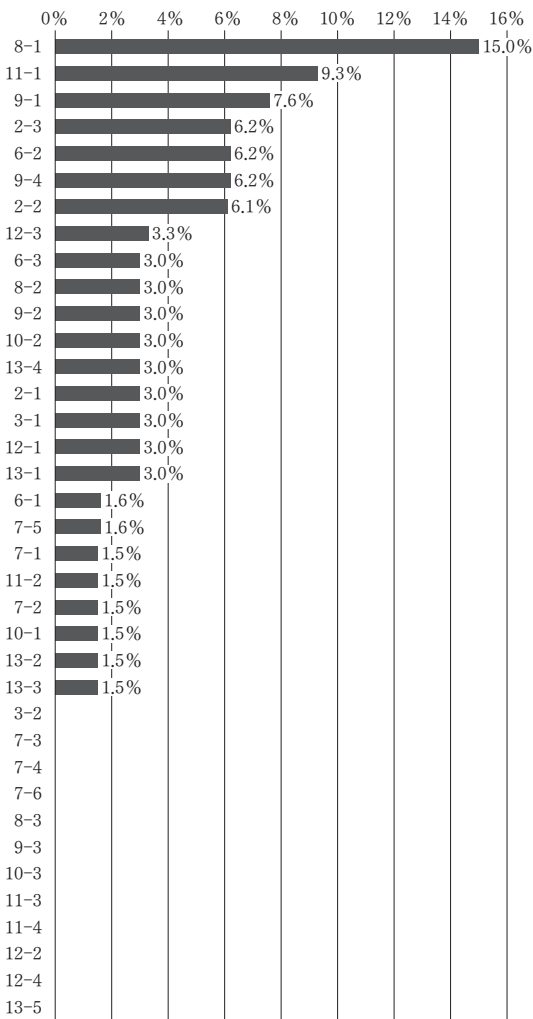
人が1人で、合計4人(9.3%)であった。なお、『図書館戦争』は「7. 以前に読んだことがある」人が24人と、37タイトルの中で最も多い図書であった。

3番目に多かったのは、岩波ジュニア新書の『読みたい心に火をつける!: 学校図書館大活用術』(木下通子著, 岩波書店, 2017) (9-1)であった。第9回の各種図書館とサービス対象者の3回目である学校図書館を扱う授業で紹介した。その利用は、「3. 大学の図書館で閲覧した」人が2

人、「4. 地域の図書館で閲覧した」人が3人、合計5人であった。岩波ジュニア新書の1冊であり、中高生向けの入門書という位置づけと言えるが、「7. 以前に読んだことがある」人は1人であった。

4番目以降にある図書も、手に取った回答者は4名以下であり、決して多いとは言えない。また、3-2の『ベンチの足: 考えの整頓』(佐藤雅彦著, 暮しの手帖社, 2021)以下の12タイトルは、授業で紹介されたもののだれにも手に取られなかった図書である。

図5 紹介した図書を手にとった人の割合



#### 4.3 教員による図書紹介の効果

教員が授業で本を紹介することについてどう思うかを自由記述形式で回答してもらった。その結果、肯定的な意見が65件(97.0%)、否定的な意見が2件(3.0%)であった。また、肯定的、否定的の両方の意見を記した回答が4件あった。これらは肯定的な意見に含めている。

肯定的な意見65件の中で言及されていることを分類、集計したところ、最も多かった意見は「授業で学んだ内容を深めることができる」の17件で、26.2%を占めた。次いで「どのような本を読めばよいかわからないときに選びやすい」といった本の選択に関する事項で16件(24.6%)であった。3番目は「知らなかった本に出会える」で15件(23.1%)となった。これに「今まで読まなかった分野の本を手取るきっかけになる」の5件を合わせると20件(30.8%)となった。このほか、「その分野に興味をもつきっかけになる」7件(10.8%)、「本を読むきっかけになる」5件(7.7%)、「本を検索するきっかけになる」3件(4.6%)、「自分で選ぶ本とは違った視点の本を得られる」2件(3.1%)、「図書館に行くきっかけになる」1件(1.5%)といった意見が見られた。

他方、否定的な意見2件はいずれも、「紹介した本が難しそう」という図書の難易度に関するも



のであった。また、両方の意見を記した回答の中にも同様の意見が見られたほか、「一度に何冊も紹介されるより熱意を持って一冊紹介された方が読みたくなると思う」「読む時間がそこまで取れるわけではないので、どんな内容の本なのか概要も一緒にあるといい」といった紹介方法の改善を求める意見があった。

自由記述の中には、「授業で紹介された図書をみたい時間が取れなくて読めない」という意見も67件中13件(19.4%)寄せられた。これに関連して、「夏休みなど長期休暇で読んでみたい」と記された意見が11件(16.4%)あった。

#### 4.4 他者からの推薦をきっかけとする読書

本研究では、教員の図書推薦が学生の読書に繋がるかを検討しているが、学生はほかにどのような人から図書を推薦されて読んでいるかも併せて質問した。複数回答で尋ねた結果、最も多かったのは友人で42人(62.7%)であった(図6)。次いで先生が27人(40.3%)、親が26人(38.8%)と続いた。他方、人に勧められて本を読むことはないと回答した人は、9人(13.4%)であった。

#### 4.5 紹介図書リストへのアクセス

3.1で述べたとおり、図書館情報学概論で紹介した図書は第6回以降、LMSにOPACへのURL

リンク付きで書誌情報を掲載した。このリストは受講生であればだれでも閲覧できる。筆者は授業終了後に、その回で紹介した図書を追記して、紹介図書リストを毎週更新した。更新は第13回の授業まで実施した。その都度更新した図書リストを受講生が閲覧したかどうかを確認した(図7)。

その結果、アクセス数が最も多かったのは第6回授業終了後で、18人(24.7%)の受講生が閲覧していた。その後は回を追うごとにアクセス数は減少し、第10回に閲覧した人は2人(2.7%)であった。しかし、第11回の授業終了後にアクセスした人は10人(13.7%)に増加した。その後、第12回で再び減少し、第13回に増加した。

リスト中の図書は、授業中に現物を見せながら紹介するほか、プレゼンテーション資料のPDFにも掲載されている。そのため、このリストの必要性は必ずしも高くないかもしれない。リストへのアクセスが学生の授業内容またはそれに関連した図書への関心度を表していると仮定した場合、第6回や第7回、第11回、第13回は学生が興味を抱いているテーマであるとも考えられる。第6回、第7回では公共図書館を、第11回は図書館の自由に関する宣言や図書館員の倫理綱領、ランガナタンの図書館学の五法則を、第13回は現代の図書館が抱える課題をそれぞれ扱った。第6回は学生に初めて図書紹介リストを提示したこと、第13回は前期の終了が近づきレポートの参考に

図6 本を勧めてもらう人

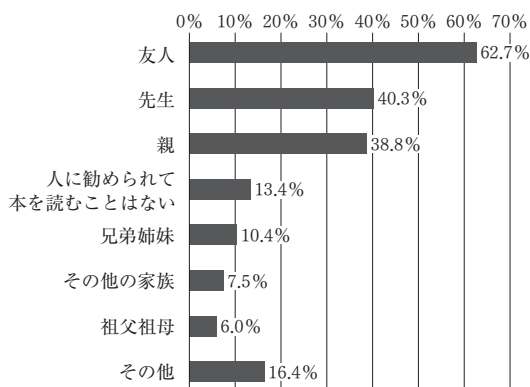
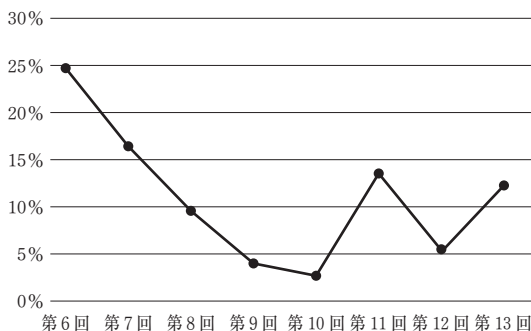


図7 紹介図書リストへのアクセス状況



するためにそれぞれ閲覧人数が多かったという理由も推察されるが、このデータからだけでは判断できない。

## 5. 考 察

本研究は、教員が推薦した図書は学生に利用されているかどうかを確認するため、筆者の担当する図書館情報学概論での実践結果をアンケート調査によって調査、分析した。その結果、授業で紹介した図書を図書館で借りたり、閲覧したり、買った人はわずかで、10人中8人ないし9人は、特に何も行動を起こしていないことが明らかとなった。図書館をトピックとした科目であることから、1ヶ月あたりの読書量は学生生活実態調査に比べて多く、読書習慣を持った受講生を対象にした研究であったと予測されたが、今回の調査では図書の利用や読書行動に繋がる形跡はあまり見られなかった。

他方、教員による授業での図書推薦に関して、受講生は概ね肯定的であった。また、他者からの推薦をきっかけとして読書に繋がるかどうかを尋ねた設問では、教員による推薦がきっかけとなって読書すると回答した人は約4割いた。先行研究においても、教員による働きかけが読書の要因となっていることから、読書行動を阻害する何らかの要因があったとも考えられる。

例えば、4.3節で扱った受講生の記述のうち、否定的な意見として、選書した図書の難易度を指摘するものがあつた。回答した学生は紹介した図書を手に取っていないので、そのような感想を持ったのは筆者の紹介のしかたに要因があつたものと推察される。図書の紹介方法に工夫の余地があるだろう。自由記述にあつた「一度に何冊も紹介されるより熱意を持って一冊紹介された方が読みたくなると思う」という意見が1つのヒントを与えている。

4.3節の自由記述からはまた、授業期間中の学生生活のようすが垣間見られた。すなわち、授業

期間中は授業やサークルなどの学内活動、アルバイト、インターンシップ、就職活動など、授業と並行してさまざまな活動に学生は取り組んでおり、読書する時間がないという記述である。その結果、紹介された図書を夏休みなどの長期休みに読みたいという意見も見られた。学生生活実態調査でも、1日の読書時間が0分と回答した人が約半数を占めることから、可処分時間のうち読書に充てられる時間は決して多くはないのであろう。しかし、残りの半数の学生は読書する時間を確保でき、60分以上と回答した学生は4分の1にあたる27.4%を占める<sup>10)</sup>。何らかの工夫により学生の読書に繋げられる余地が残されているとも言える。

本研究の目的は、大学の科目で学習する内容を補足したり、深めたりするときには有用な参考文献情報を学生に提供したときに、それが有効活用されているかどうかを把握することであつた。その結果は有効とまでは言えなかつたが、図書の推薦が教員からの助言あるいはメッセージとして受け止められていることが示唆された。授業終了後の追跡調査により、その成果を把握することが今後の課題である。

## 6. おわりに

本研究は、筆者が担当する科目での実践を対象とした事例研究である。したがって、本調査結果が大学生の学習行動や読書行動を代表するものではないことに留意する必要がある。また、科目の内容や進めかた、学問分野によってもその結果は異なるであろう。調査対象および調査手法などの検討も今後の課題としたい。

最後に、2023年度図書館情報学概論を受講し、アンケート調査に協力してくれた学生にここに記して感謝の意を表したい。

### 注・引用文献

- 1) 戸田まり, 田辺園枝, 森實祐里. 大学生の読書行

- 動：札幌校での実態調査から．北海道教育大学紀要（教育科学編）．2020, vol. 71, no. 1, pp. 115-123. <https://doi.org/10.32150/00006905>, (参照 2023-09-17).
- 2) 佐藤由紀, 近森節子, 酒井克彦. 大学生の読書実態と生協組織を通じた学生主体の読書推進運動の構築. 大学行政研究. 2007, no. 2, pp. 61-73. [https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_action\\_common\\_download&item\\_id=5779&item\\_no=1&attribute\\_id=22&file\\_no=1](https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=5779&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1), (参照 2023-09-17).
  - 3) キムハニ, 小山憲司. “大学生の読書生活から見る読書推進の可能性”. 第23回研究会予稿集, オンライン, 2021-11-06, 情報メディア学会, 2021. <https://www.jsims.jp/kenkyu-kai/yokoku/23/23-2.pdf>, (参照 2023-09-17).
  - 4) 上月敏子. 学生の生活実態と読書活動に関する一考察：大阪体育大学教育学部学生の場合. 2018. 大阪体育大学教育学研究, no. 2, pp. 47-71. <https://doi.org/10.50830/00001685>, (参照 2023-09-17).
  - 5) “みちのきち Kokugakuin Book Project”. 國學院大學. <http://michinokichi.kokugakuin.ac.jp/>, (参照 2023-09-17).
  - 6) 王帥, 濱中義隆. 大学の読書実態：全国大学生調査より. IDE 現代の高等教育. 2021, no. 621, pp. 42-49.
  - 7) これからの図書館の在り方検討協力者会議. 『司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について（報告）』2009, 文部科学省. [https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/fieldfile/2009/09/16/1243331\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/fieldfile/2009/09/16/1243331_2.pdf), (参照 2023-09-17).
  - 8) 分類記号は, 国立国会図書館オンライン (<https://ndlonline.ndl.go.jp/>) を用いて付与した。
  - 9) “第58回学生生活実態調査概要報告”. 全国大学生活協同組合連合会. 2023-03-01, <https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>, (参照 2023-09-17).
  - 10) 同書.